

11月

出典：全国パワースポット



あの日のあの川 リレー日記 ～第22話～

あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第22話主人公 守谷賢人

(筑波大学社会・国際学群国際総合学類 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：千葉県利根川)

「小さな冒険」

いつのこと？：小学生

どこの川？：利根川水系印旛沼

いつもの「あの日のあの川」と一風変わって、今回は印旛沼について取り上げようと思う。印旛沼は、千葉県北西部に位置し、北印旛沼と西印旛沼に分かれている。私の地元である印旛はその二つの沼の間にある小さな街だ。西印旛沼には鹿島川・高崎川・手繰川・神崎川・新川・桑納川・師戸川等の河川が、北印旛沼には江川・松虫川等が流入し、印旛沼の水は、長門川を通過して利根川に流れる。そしてその水は工業用水や農業用水、上水などに使われている。地域の人々にとっては欠かせない存在の印旛沼であるが、幼い頃の私は沼自体に興味がなく、ましてや沼の果たす役割など知りもしなかった。

そんな私に印旛沼を訪ねる契機が訪れたのは、小学校中学年の頃のことである。ある日の全校集会で校長先生から以下のようなアナウンスがあった。

「印旛沼でカミツキガメが発生しました。みなさん、沼には絶対に近寄らないでください！」

禁止されることこそやりたくなくなってしまうのが小学校中学年男児の性だ。しかもカミツキガメというなんとも珍しい生き物を見ることができるといふ。印旛沼への興味を一気にそそられた私と友人カンちゃんは、すぐに印旛沼での冒険を計画した。決行の日は、次の土曜日になった。

ワクワクしながら日々を過ごし、ついに当日を迎えた。はやる気持ちを抑えながら、自転車で印旛沼へと向かった。家を出て役所を目指し、役所の裏の道をまっすぐ進んで坂を下る。そうして目の前に現れたのが印旛沼だった。「大きい…！」ただただそう思った。

初めて見る印旛沼の規模に圧倒されつつも、私とカンちゃんは本来の目的であったカミツキガメの搜索を開始することにした。それで、とりあえず近くにあった用水路のようなものに近づいてみたのだが、それがとにかく臭く、汚かった。到着した時の感動とのギャップにガッカリしたが、目的は果たさなければならぬので用水路に網を入れてはすくう動作を繰り返した。しかし出てくるのはゴミやザリガニばかりでカメが出てくる気配など微塵も感じられなかった。

成果をあげることができないまま時間ばかりが経過した。そうして、この用水路にはいないのだと判断した私とカンちゃんは、場所を変えることにした。どこかもっとカメのいそうなところへ移動しようと、自転車で跨り沼の周りを走り出した。その時私はハッとした。沼と周辺の田んぼ、夏の空とが調和した美しい景色、心地よい風、昼過ぎに降り注ぐ太陽の光…。とにかく気持ちが良かった。静けさの漂う雰囲気とは裏腹に気分は驚くほど高揚した。思わず隣で自転車を漕いでいたカンちゃんに声をかけてみると、カンちゃんも同様の気分を味わっているようだった。それから私たちは、カメを探すという本来の目的も時間も忘れてひたすらに自転車を漕ぎ続けた。この景色の中だったら、いつまでもどこまでも自転車を漕いでいられるような気がした。

気づくといつの間にか沼を抜け出して丘の上まで来てしまっていた。カメのことなどその時はもうどうでもよくなっていたので、沼には戻らずそこでカンちゃんと遊ぶことにした。丘の上には展望台があり、そこから沼が一望出来るようになっていたので、夕方まで丘に残って夕焼けの沼の景色を待った。

いよいよ夕焼けの時間が近づいてくると、昼間は真っ青だった空がどんどん茜色になっていった。沼の水がそれを反射し、目の前の景色が全て茜色に染まり、その美しさに感動を覚えた。今でも思い出すことができるほどである。

大学生になった私はときたま印旛沼の近くを自転車ではなく、車で走ることがある。今では印旛沼との接点がめっきり減ってしまったが、あの時の小さな冒険は今でも忘れられない。どこかゆったりとして変わらずにいる美しい景色を見ながら、あの時感じた高揚感を思い出す。

※カミツキガメは大変危険な生き物です。決して近づかないようにしてください。

(次は山田玲奈さんにバトンを託します)